

星川清司 小伝抄

—こてんしょう—



星川清司

小伝抄

文藝春秋版

小伝抄

平成二年三月十五日 第一刷

著 者

星川清司
ほしかわ せいじ

発行者

豊田健次

発行所

株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話代表(〇三)二六五一二二一

印刷所

凸版印刷

製本所

加藤製本

定価はカバーに表示してあります

© Seiji Hoshikawa 1990

Printed in Japan

ISBN4-16-311730-X

目録

小伝抄

五

憂世まんだら

一〇七

装画
小村雪岱

小伝抄

小
伝
抄

文政十三庚寅年十月廿九日は、くもりて風寒し、夜半夢裡しばしば雨声をきく。睡を貪りて四ツ時に至る。午すぎ権八来訪有て、——と、あたくしの日記にある。

その日あたくしは朝めしとも午めしともつかぬもの食してから、いつものようにものぐさく、ひとり炬燵にもぐりこんでいた。中の亥の日に炬燵びらきをしてから訪れるひともない。しいんと鼻の先まで冷えてしずまりかえったその侘しさ。月が替れば例年のごとく葺屋町堺町の三座で顔見世狂言の幕があくから、この晦日には戯場の裏方はもとより、芝居茶屋では屋根に飾りものをしたり、ひいき筋からの引幕、酒樽、米俵、炭俵などの積物がきたり、新狂言の番附を配ってあるいたりで、さぞかし忙せわしかろう。去年までは狂言部

屋の隅にいたあたくしもずいぶんと忙しかった。狂言方は常詰めで初日になれば幕あき幕切れ、道具替りの柄きを打つのが役目のうちであるし、幕の受持があつて稽古読み合せ、初日から三日のあいだは役者のうしろに控えていて台詞をつけるのも狂言方の役目という御定方であつたので、顔見世ともなればそれこそ目のまわるようであつたけれど、いまとなればあの頭取座のわきの狂言部屋がなつかしく、なんぞとよしなしごとを思うともなく炬燵で茶を啜すすっていた。

去年の暮に師匠南北をあの世へ送つて、みずからも芝居町から遠ざかつて以来、なにをなさうでもなくこの深川安宅あたけの大口横丁に逼塞ひきこもっている。うら悲しいような無聊の日とながら、世をすね隠者めいた独居ぐらしのひそかなたのしみを窃ひそみ、といえばきこえはよくろが、畢竟なまけものが世に容れられなかつた負け惜しみ、ただの気取りが有態のところであつた。としもかぞえていつか五十と一になつた。ひとかどの狂言作者たらんと志してよりぎつと二十余年が過ぎ去つてしまっている。狂言部屋は放蕩者の捨て所といわれ、道楽の成れの果てだと蔑む向きもあるけれど、気転と気儘と上根と愛嬌とをもちあわせ、それに筆が立ちさえすれば住み心地のいい場所である。男前の狂言方が粹な稿物の着ながし、博多の帯を掛長にしめ、緋の襦袢の袖ちらつかせて、揚幕をわざと目立つようにチャリと音させてあげ、舞台にあらわれて幕切れの柄を打つ。これを出打ちといつて御存じの

かたも多からうが、おもわず見惚れる姿のよきであつた。あたくしはなにもその姿に惚れこんで作者部屋を志願したわけではないけれど、いまになって思えばきつと夢見心地であつたのは慥^たかで、それでも修業をして、立作者とまではいかぬまでも、見習狂言方からはじまって、序開き二つ目を書いてみて、これが相応に書けると認められれば三枚目、やがては二枚目ぐらいまでは昇進できるやもしれぬと勇み立っていた。都座に過ぎたるものが二つ有り延寿太夫に鶴屋南北、という落首があつたほどの師匠南北も、思えば立作者として番附に名をつらねたのがまさに五十歳になんとした年、四世鶴屋南北を称したのが五十七歳である。いまのあたくしの五十というところから、はじめて師匠は世に出ていった。こちらは逆さで、師南北のはじまりがあたくしの終り。いくじもなく齡五十にして何事も為さず隠世の真似事とはなんとも情けないだらう。「こいつはいけない、こんな御仁が師匠として目の前に立っていられたのじゃあ押しつぶされるばかり。どうにもこうにもなつたものではない」とおもいしらされ、にわかには隠者気取りにとりつかれたのは、もう五年も前のこと、忘れもしない文政八年の七月、中村座での二番目狂言「東海道四谷怪談」五幕続きが蓋をあけたそのときであつた。あの戸板がえしの工夫をはじめ趣向のかずかず、善男善女はみな滅亡し、栄えた悪人輩^べも滅び去つて、あとに残るは作者ひとりの高笑い。ただもう、ぶつたまげた。おそれ入った。逆^{さか}も敵いっこはねえ。このとき作者はな

んと七十一歳。「もうだめだ。とんでもねえ化物だ」と肝がつぶれてそれっきり。こつちの筆が折れてしまった。いくじもないとひとはいうかしらないけれど、「もうだめだ」というのが本音であつて、ほかにいいようがない。致し方ない。その師が此年ごろ新作狂言がはたと絶えた、はてどうしたことかと思ひはじめ、十一月になつて漸く表われた書きおろし「金幣猿島都」に一世一代と附記してあつたので、おや、なんだかへんだぞと思つていたら、その月の廿七日にあつてもなくあの世のひと。七十五歳であつた。葬式は年が明けての正月十三日に本所押上春慶寺で行われた。

なにしろ巨匠であつた。巨きすぎた。あたくしの分際でああいうひとの門下になつたのがそもそもの身の不運、というのになにやらすぐに尻尾を巻きたがるいいぐさながら、とにかく、いきつく暇というものがまったくなかつた。弟子入りののがあたくし二十七のとし、師匠が五十六でいまだ南北を名告らず、勝俵蔵と称し本所亀戸村に住んでいたころ。当時から師匠は「心謎解色糸」だの「絵本合法衛」だの「謎帯一寸徳兵衛」だのと矢継早の大当りを連発して、そのたびごとにあたたくしは誇らしいやら、叱言を浴びておろおろするやら、こつちもいっぱし俵為三なんぞとなにやら賈物くさい名をゆるされ、いい気分になつて狂言方を気取つていた。とはいふものの、そのじついつこうに役立たずで、筆取はおろか、書拔、附帳、大道具帳、看板番附の下書、表札表示、どれひとつとってもまんぞ

くにはいかなかった。それでもながいこと縫りついていた師匠にとつぜん他界されてしまふと、たのみの綱はぶつりと切れた。あたくしはただもうぼんやりと途方にくれているうち、葬式の日には深川黒船稲荷地内の師匠の住居から本所押上春慶寺まで練つてあるいた葬列のなかに加わつていた。「いけないねえ、もうだめだ、もうだめだ」とあたくしは幾たびそれをつぶやいたことか。亡き師匠とのつきあいは、だめだにはじまつて、とうとうだめだで終つてしまった心もちがする。なにからなにまで迎もかなわぬ御仁であつた。生きていれば雷よりもおそろしく、この世におさらばするとなれば悠々として、おのれの死後葬礼に至るまで茶番氣分の遺言というおまけまでついたのでから心憎い。葬列の日は亀戸の二の卯にあたり殊のほか賑わつた。見送りの者にはだんごを一包みと正本仕立ての「寂光門松後萬歳」しやうくわんまつご まんざいと題した自作の小冊子を一冊ずつ贈るといふ洒落のめした趣向である。四谷怪談の鳴りひびくような作者の高笑いが、またしても葬列のなかにいたあたくしの耳の底できこえていた。その正本仕立ての冊子「寂光門松後萬歳」は、いまでもあたくしの机上にあつて笑いつづけている。

師匠にすがつての空だのみはあえなく消えた。もともといかにも覺束なく思えた筆はぼつきりと折れ、とし五十になつて以来あたくしはこの安宅裏の仮居に逼塞つて、はやくも季節のひと巡り、師匠の祥月命日を程なく迎えようとしている。侘しきはつるばかりで、

いつもならば欠かさなかった此月の十夜にも、浅草どぶ店の会式にも、根津権現や目黒行人坂の紅葉見物もつい億劫になって行かずにしまった。この一年がほどは何事もなさず、何事も思わず、ただ惘然として懶惰（らんだ）の日を窃（ぬす）んでいる。——とまアわが身のことはさておき、この日、十月廿九日の午すぎになって御免なさいやしと恐る恐る訪れてきた権八という男が、ものを書く気の久しく失せていたあたくしに筆を執らせる機縁となったので。

○

権八というのはかねて顔見知りの男で、芝居町の札売りであつた。仲間うちでは送りの権八と称ばれていた。慥かもとは汐留の扇屋という船宿の雇い船頭だったときいている。この日は微塵縞の衾などを着こんで権八にしては小ざつぱりとした身装（みなり）であつた。武骨な両膝をそろえ、「そこは寒いから炬燵におはいり」とあたくしがいくらすすめても、わる固く従おうとしなかった。「じつはぜひにおねがい申したいことがあつてめえりました」と権八はいった。そしてふところから小判で十両、紙に包んだものを取り出し、あたくしの前におく。あたくしは裏店ぐらしであるとはいえ、日々の生計（たつき）にはさして困っていない。それにひきかえ権八は、ちかごろもとの船頭にもどつていたはずだから、十両とはいかな

る頼み事にもせよ大枚にすぎるではないか。さて、なんであろうかとあたくしは、権八の「頼み事」なるものをあやしんだ。

日々の生計に困っていないと書いた事のついでに、茲でちょっとあたくしの身上みじやうというのを挿しはさんでおこうか。——あたくしという者は、池之端仲町にあつて松葉屋という小間物諸色問屋をいとなむ商家に生れた。かなり手広くやっている親代々の見世であつたけれど、一人息子でありながらあたくしはそのあとを継がなかつた。二十一のとしに親があまりにうるさくいうので詮方なく、おさいというとし十七になる嫁をもらつたら、これがおもいのほかのしつかり者で、たちまちにして奉公人どもを手なづけ、舅姑までまるめこんで、松葉屋の切り盛りをなんの苦もなくやつてのけた。みごとに女房ぶりであつた。あたくしはすっかり図にのつて翹をひろげ、外に女をつくつた。賢い嫁はそしらぬ顔。あたくしは尺八三味線を手はじめに、茶番、浄るりと横好きの芸事かぎりもなく手をのばし、さりとてどれもこれもモノになつたためしはなく、あぜくにはとうとうおやじさまの大目玉くらつて、おさだまりの勘当と相成つた。これ幸いとあたくしは狂言作者を志願し、氣随氣儘な借家ずまい。嫁はあわてずさわがず松葉屋をりっぱに繁昌させ、いまでは帳場に尻をすえてでんとおさまっている。それゆえ生計の錢を費いはたせばそつと生家の松葉屋へでかけていって、嫁からいくばくかをせびり取ってくる。いままでにちちくりあつた女

は十の指いくたびか折るほどなのに、氣樂といおうか、不がないといおうか、いまだにとし五十になっての独り身ぐらし。方図もなく川柳にいうところの、尺八でくる親類の屑、とはまさにあたくしがことであつた。

さて咄は権八にもどつて、その日、あたくしの前に十両という大枚をさし出してのねがい事とは、「わっちのしっているかぎり小伝のことを申し述べますので、そいつをどうか書きとめておいてくれますように」権八がいう頼み事とはそういうものであつた。そういつて権八はすがりつくような目をしてあたくしを見た。すがりつくような、というのはあてずっぽうなあたくしのいい回しで、なんとも名状し難いまなざしであつた。醜怪な、というのはちといひすぎだろうが、まアそれに程近かつた。というのは、この権八という男、いかにも船頭らしく鍛えたいかつい軀つきで、けれどもその猪首から上には、どうすればこうまで拙い造作になるであらうかと思わせる面貌が乗っている。場所をまちがえてくつつけたとしかいいようのない双つの目は、片方だけが細くて奥のほうで光っているし、片方はぎろりと目玉をひんむいている。その目の下にはひん曲つたでかい鼻がしら、めくれかえつた分厚い上下の唇、真黒に日灼けた痘痕づら、げじげじの一本眉で、おまけに縮れ毛という念の入った不細工な道具立てである。としかつこうは大方、四十なかばと見たがよくわからない。そういう怪異な男が律義にかたく両膝をそろえ、窮屈そうに身をか